

令和 3 年度

小 論 文

10 : 00 ~ 11 : 30

国 文 学 科

学校推薦型選抜(一般)

注 意 事 項

1. 開始の合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があつてから受験番号を小論文解答用紙の指定の欄に記入
しなさい。
3. この冊子は5ページあります。
4. 印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所があつた場合は、すみやかに申し出なさい。
5. 小論文解答用紙は2枚入っていますが、提出するのは1枚だけです。残りの1枚は下書き用です。
6. 小論文は縦書きで書きなさい。
7. 冊子と下書きに用いた解答用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近代以降の歌論には、それ以前が負うことのなかった困難で奇妙な問いが課せられた。短歌千三百年にはさまざまな節目が存するが、この問いは間違いなく、歌論史の節目¹として働いている。

短歌の三十一音という量には本来に時代を支える意義があるのか、というのがその問いである。たとえば、明治四十三年に石川啄木はこんなことを書いている。

一生に二度とは帰つて来ないいのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。たゞ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。実際便利だからね。歌といふ詩形を持つてるといふことは、我我日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。

(「一利己主義者と友人との対話」)

すぐに逃げてしまう命の一秒一秒を表現するためには短歌が有効だ、と啄木は言っている。形が小さくて、手間暇がかからず、一瞬の心動きを捕まえるのに便利だから、というのがその理由である。すぐに思い出すのは「ある朝のかなしき夢のさめぎはに／鼻に入り来し／味噌を煮る香よ」「一握の砂」といった歌である。目覚めに一步入った、まだ意識が半分は夢の余波のなかにいる状態、そこに漂つてきたみそ汁の香、目覚めを促すようなその一瞬の香りがここでは捉えられている。こうした一瞬の心動きを表現することは、啄木の得意手の一つでもあった。

形の小ささと簡便さ、要するに、手軽に作れることが歌の価値だよ、小さくて手軽だから、命の一瞬を写し取るシャッターチャンス逃がさないんだよ、とレンズ付きフィルムのコピーみたいなことを、啄木は言っている。それは日本人の数少ない幸福の一つだよ、と添えているところが心憎い。

短歌形式への信頼が自明の前提になっていたら、こういう発言は出てこない。むしろ、形の小さいこと、簡便であること、そういう条件を宿命づけられたこの小詩型は、はたして存在する価値を持っているのだろうか、とキグする心から出てくる発言である。古典和歌における次のような判断と比べるとそれがよく分かる。

三十一の際に真相のことわりきはまれり

(後鳥羽院「後鳥羽院自歌合」)

歌はこの国の風俗なり。国に生まれたらむもの、誰か詠まざらむ

(武者小路実陰「初学考鑑」)

三十一文字にはすべての道理が表現されてしまう、と後鳥羽院は言い、実際は日本に生まれた者はみんな歌を詠むものである、と言っている。ここでは短歌形式は、存在自体の意義を問われることのない詩型として存在している。形式への揺るぎない信頼は断定的な口調からも感じられる。そうした信頼の上に立って(歌とは何か)という問いが発せられ、それへの後鳥羽院なり、あるいは実陰なりの答えが示されているのである。

しかし啄木においては、形式は自明の前提ではない。意義を確認しなければ壊れてしまうもうい詩型だから、前提に溯るの^イである。

啄木にはなぜ前提確認の作業が必要だったのだろうか。『新体詩抄』にはじまる短歌否定論が視野に入っているからである。明治に入って起こった文芸革新の波は、伝統詩型短歌の土台を問い直す契機として働いたのである。

三十一文字や川柳の如き鳴方にて能く鳴り尽すことの出来る思想は、線香烟花か流星位の思に過ぎざるべし。

(外山正一『新体詩抄』序、明治十五年)

いにしへの人は質朴にて其情合も単純なるから僅かに三十一文字もて其胸懷を吐きたりしかど、今日このごろの人情をば、わづかに数十の言語をもて述_レ尽すべうもあらざるなり。

(坪内逍遙『小説神髓』明治十八年)

詩といえばまだ を指していた時代に、西欧詩学を導入して新しい詩の形式を創ろうとしたのが『新体詩抄』であり、小説というジャンル確立を意図したのが『小説神髓』である。新しいジャンル創設の動きが、ともに短歌を標的にしている点に注意を払いたい。和歌革新運動になぞらえていえば、これは新派文学による旧派文学批判だった。批判的を短歌における表現量に絞ったところに、その特徴がある。昔の人は質朴だから三十一文字でも十分だったが、今は社会も人間も複雑だから短歌ではとても無理だ、と言うわけである。表現論としてはもちろんこれは根拠のない、いいがかりというものである。しかし新しいジャンル創設への時代の熱意がこれを許して、以後、こうした表現量不足説が、短歌批判の常套手段^ウになった。外山や逍遙の批判は、明治末期には歌人尾上柴舟の「短歌滅亡私論」が、短歌に連作が多いということは一首では表現しきれない証拠だという形で受け継ぎ、敗戦期には桑原武夫によって「がんらい複雑な近代精神は三十一字には入り切らぬものである」と再利用された。

形が小さくて手間暇のいらぬ詩型の大切さを啄木が説く背景には、このような短歌批判、とりわけ歌の表現量への批判が存在していた。そうした否定論滅亡論に啄木が危機感を持っていたことは、「忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じをアイセキする心^エが人間にある限り、歌といふものは滅びない」(『歌のいろく』)という見解からも窺える。

こうして近代以降の歌人たちは、短歌とは何か、短歌にはどんな意義があるか、という問いに必ず表現量の意義を加えねばならなかった。量の問題抜きに自分の短歌観を語ることは不可能だった。短さはどんな豊かさか、という問いに、佐佐木信綱と斎藤茂吉は次のように応えている。

短歌の形の短いのは、人間の切迫した感情を端的に述べるに最もふさはしい。その形が国初から行はれ、なほ将来永久に行はれるであらうことも、故よしがある。

(佐佐木信綱「詹詹録」)

短歌は三十一音の詩で、その形態がいかに小さい・けれどもさういふ小さいものをも軽んぜずに、心身の力を打込んでるところに、歌づくりの野呂間さと而して取柄があるといふものである。

(斎藤茂吉「短歌道一家言」)

啄木が小さいから手間暇の要らない詩型と見たその小ささを、信綱は短いから切迫した感情表現に最適と捉え、茂吉は、だから心身の力を打ち込むべきもの、と全力投球説に逆転させながら意義づけている。信綱の短歌観として有名な「ひろく、深く、おのがじしに」は、この切迫した感情をもつともよく表現するための指標であり、茂吉の全力投球説は「実相に観入して自然・自己一元の生を写す。これが短歌上の写生である」とひと連なりである。実相観入をあまり難しく考える必要はない。単に観察するだけではなく、対象の本質にニクハクする全力性を茂吉は説いているのである。短歌の短さを意識したときの茂吉的な処方箋がそこに現れている。あと三人だけ急いで確認してみる。

「微かなひびき、微かなゆるぎといった風な一呼吸を歌ふ態度が取ればせぬか」(窪田空穂「歌壇時感」)。「歌はれる事象は、歌ふ主観が全心的に集中されれば、されるほど単一化されてまゐります」(島木赤彦『歌道小見』)。「短歌は、生活者にとって、ささやかな夢を画きとることのできる詩型である。浪漫的断片を書きとどめる即興詩である」(岡井隆「現代短歌の存在理由」)。

日常生活の中に起こる心のさざなみを歌うのが短歌であると空穂は言い、心が集中すれば歌われる事象は単一化される、と赤彦は言う。岡井隆の浪漫的断片説を含めて、これらは短歌における「短さの豊かさ」を視野に入れることよって成立した短歌観である。近代以降の批評は、こうした短歌観に深く規定されている。

(三枝昂之「短歌批評の領域」、藤井貞和編『短歌における批評とは』所収による)

(注) レンズ付きフィルム……フィルムを最初から内蔵した軽便なカメラ。

問一 傍線部ア、オのカタカナを漢字になおし、漢字は読みがなを解答欄に書きなさい。

問二 波線部「国に生まれたらむもの、誰か詠まざらむ」から助動詞を全て抜き出し、助動詞の文法的意味・終止形、ここでの活用形を書きなさい。(二つについて一行で書くこと)

問三 空欄 には漢字二字を、考えて入れなさい。

問四 傍線部1「歌論史の節目」とあるが、筆者はどのような点で、「節目」と考えるのか、100字以内でまとめなさい。

問五 傍線部2「短さの豊かさ」とあるが、このような価値観に対する、あなた自身の考えを、具体例やあなた自身の具体的な体験を挙げながら論述しなさい。(600字以内)